

瓜子姫と天邪鬼

昔々、子供のいない老夫婦がいました。

おばあさんが、川で洗濯をしていると、大きな瓜が流れてきました。

おばあさんは、瓜を家に持ち帰り、おじいさんがナタで割りました。

すると、中から可愛い女の子が出てきたのです。

「なんとまあ、かわいい女の子じゃ」

「仏様からのプレゼントですかねえ」

女の子は、「瓜子姫」と名付けられ、すくすくと成長しました。

「姫や、おじいさんとおばあさんは、出かけますが、誰も家に入れてはダメですよ」

「分かりました」

瓜子姫が留守番をしていると、尋ね人ができました。

「瓜子姫や、戸を開けておくれ」

「誰も家に入れてはダメと言われていいますので」

「もう何日も食事をしていないんだ。何か分けておくれ」

「・・・分かりました」

瓜子姫は、戸を開けてしまいました。しかも、相手は、悪名高き天邪鬼だったのです。

「馬鹿め」

「きゃあ！」

天邪鬼は、瓜子姫をさらい、木に括りつけて戻ってきました。

そこへ、おじいさんとおばあさんが戻ってきて、言いました。

「瓜子姫や、喜びなされ」

「桃太郎様が貴方に会いたいそうじゃ」

「これから、お迎えに来てくださるそうですよ」

「分かりました」

天邪鬼は、瓜子姫に化け、桃太郎の妻になろうとしました。

そして、桃太郎の一行が、天邪鬼を迎えに来ました。

桃太郎の家に向かう道中、八咫鳥が激しく鳴きました。一行は、不審に思い、少し調べたところ、木に括りつけられていた瓜子姫を見つけました。

「貴方は、瓜子姫様ですか？」

「はい」

「では、我々に帯同しているのは誰なんでしょう？」

「天邪鬼です」

「しまった、桃太郎様、その者は、天邪鬼です！」
「気付かれたか、死ね、桃太郎！」
「甘く見るな、すべてお見通しだ！」
桃太郎は、天邪鬼をやっつけて、瓜子姫の元に駆け寄ります。
「大丈夫かい、瓜子姫」
「ええ、殺してしまったんですか？」
「いや、気を失ってるだけだよ」
「良かった」
「噂にたがわない、優しい方だ」
「私を妻として迎え入れるんですか？」
「ああ、そうさ」
「…ダウン症なんです」
「僕もだよ」
「え！」
「君と同じだよ」
「知りませんでした」
「一緒になってくれるかい？」
「…幸せになってはいけない気がするんです」
「人は誰でも幸せになる権利がある」
「天邪鬼さんも？」
「…本当に優しいんだね」
「よく言われます」
「あはは、今の世の中には、その優しさが必要とされているんだ」
「共に、この世を優しさであふれたものにするために尽力してほしい」
「私にできますか」
「もう十分してる」
「僕たち、ダウン症の者にしかできないことがある」
「何ですか」
「優しさで世界を変えることさ」
「素晴らしいお考えですね」
「人並み以上に苦労した結果たどり着いたんだ」
「いつまでも支えていきます」
「ありがとう、何よりの理解者だよ」
「本当に幸せになっていいんですね？」
「世間が味方してくれる。そういう世の中になったんだ」

了

Copyright (C) 2016. Angel RISA. All Rights Reserved.